毒の花

ホテルのカフェで西川の自分を見る目の色に、女は「任務」の成功を確信していた。西川の老いてなお端正な面貌に憂色が濃い。七十を過ぎて妻と別れ、病苦にも悩むと書いてよこした男は、珈琲カップに目を落として、問わず語りに口を開いた。

「…手紙にも書いた通り、僕の方はこんな有り様でね。昔、あの時、君には、若気の至りというか、すまないことをしたと思ってる。これまで、ずっと後悔してた…」

珈琲を一口飲んだ男は、ようやく目を上げて言った。

「それで、昔の君の住所がまだメモに残ってたので、思い切って手紙をーー」

かつて自分を弊履のごとく捨て去った男の悔恨を、女は微笑と共に受け容れた。

「もういいんです。そんな何十年も昔のこと」　ありったけの優しさを込めて続けた。

「あなたからいい思い出も沢山もらったからーー。そんなことより、体を大切にして…。毎日の食事はどうしてるの？　病気なんだから、きちんと栄養を摂らないと」

「年金暮らしの独り身だからね、自炊してるんだけど、ろくな物も作れなくて」

「そう…。たまには私が、食事のお世話に行けたらいいんだけど」

西川の目に灯が宿ったのを、女は見逃さなかった。男がためらいがちに訊いた。

「玲子。今も実家に住んで、名字も江崎なのは…」

「ええ、独身。縁がなくて…。情けないわ」　寂しく苦笑し、弓に矢をつがえた。

「どうだろう。もし…気が向いたら、時々うちに…遊びに来てもらえると…」

女はカップを手に、紅色の花が開くような笑みを浮かべ、弓の弦をきりりと引いた。

「ありがとう。人生って不思議ね。また二人で過ごせるなんて、思ってもみなかった」

西川の顔に、おそらく何年ぶりかだろう、生気が甦った。急に饒舌になった。

「いや、実はね。さっきロビーで会った時、ほんとに驚いたよ！あんまり若々しいから。漠然と想像してたのとまるで違う。あれから四十年以上もたつのに、今も美しい…！」

そうだろう。六十代後半のはずの女に五十代の色香を見れば、老いた血も騒ぐだろう。

女は、もう昔の恋仲に戻った気分の西川の顔の真ん中に、引き絞った矢を放った。

「茶番はここまでよ。もう手紙なんかよこさないで！ほんとにウザイったらないわ！」

カフェ中に聞こえる声音で言い放ち、席を立った。女の豹変に愕然とする男を後目に、ヒールの足音も高く歩み去った。客たちの注視と、男の狼狽と絶望が背中に響いてきた。

そのまま車で病院に向い、入院病棟の〈江崎玲子〉とネームのある個室に入った。

玲子が病み衰えた身をベッドに起こし、急き込んで訊いた。

「どうだった？」

「バッチリ仇討ちしたわよ。色男気取りのボケじじい、死ぬほど恥をかかせてやったわ」

「じゃ、計画通りにいったのね！　あの馬鹿、まるで気付かなかったわけね？」

「気付くもんですか。何十年もたってるんだし、私と姉さん、そっくり姉妹って看護師さんたちにも言われるんだから。あれでアイツの病気、もっと悪くなったんじゃない？」

病室に女二人の秘めやかな笑いが、二輪の花のように揺らめいた。